

「庭とエスキース」 奥山 淳志 著 みすず書房 2019年4月発行

本というのは不思議なもので、そのとき自分に必要な内容のものが、向こうから自然と歩み寄ってくると思ったことはありませんか。

今年も皆さんに紹介したい本を選ぶにあたり、日々の生活の隙間時間にいくつかの本を読みました。自分の興味からいけば、かつて札幌の琴似にあった「くすみ書房」の店主が、生前に自身の経験や本屋への思いを綴った『奇跡の本屋をつくりたい』（久住邦晴著、ミシマ社、2018年8月）という本が、同じ本を扱う者として、今の私の心には深く刺さりました。それから、『パッタを倒しにアフリカへ』（前野ウルド浩太郎著、光文社、2017年5月）も読み物として面白かったです。読んでいて、たかひのてこの氏の海外旅行記を彷彿とさせました。一見不真面目なようでいて、昆虫学者という、少年のころからの夢をかなえるべく奔走する著者の、研究にかける熱い想いや、昨今のポストドク研究者が置かれた状況がよくわかり、今後研究を続けていこうと考えている人には参考になる部分もあると思います。

さて、今回推薦本として挙げた『庭とエスキース』は、高専生の皆さんには大変渋すぎるセレクトであると言えましょう。写真家である著者が、北海道新十津川町の最後の開拓世代として、自らの建てた丸太小屋で自給自足の生活を営む「弁造さん」を季節ごとに訪ね、14年にわたり撮影し続けた、その「記憶」の物語です。そう、これは徹頭徹尾、25歳の若者が79歳の老人と出会い、92歳で亡くなるまでの日々を綴った一途な「回想録」なのです。正確に言えば、最後に弁造さん亡き後、弁造さんを取り巻いていた人々との交流について語られる部分もありますが、ともあれ、多少の意図せぬフィクションはあるかもしれないにせよ、会話の内容やそのときの情景までもが事細かに描かれていることに、記憶力が年々低下している私は、本筋とは全く関係のないところで、著者に驚愕しながら読んでいました。

弁造さんが既にこの世にはいないことは、本書のかなり早い段階で語られます。やがて来る弁造さんの不在という結末に怯えながら本書を読むと、愛着にも似た不思議な感情が、心に芽生えます。個人的な話になりますが、弁造さんが、数年前に亡くなった、大好きだった自分の祖父とほぼ同じ年に生まれていることも関係しているかもしれません。

弁造さんは、科学の可能性自体は信じてつても、いつか今の暮らしには限界が来ると考えていて、そのとき「戻る場所」となるように、自給自足の暮らしを続けていました。自らの庭で作物を育て、木を植え林を育てては、丸太小屋を建てるための木材やキノコのホダ木、冬のストーブ用の薪としたり、池にはタンパク源となるようなタニシや鯉、鮒などを育てていました。その世界を誰に伝え、託そうとするでもなく。

小さいころから本当は絵描きになりたくて、農閑期に東京の画学校へ通ったりもしていた弁造さん。不遇なできごともあり、その夢はついにはかないませんでした。しかし亡くなるまで、小さな部屋の真ん中にはイーゼルが据えられ、いつまでたっても完成することのないエスキースばかり描いていた弁造さんは、幸せだったのではないかと思えました。表現という行為や、植物や生き物を育てることは、時に挫折を味わうこともあるけれど、いずれもいわば人間の原点というか、小さな生きる喜びにつながると私は考えています。そういった喜びが、弁造さんの人生には溢れているように思えました。この本が気に入った人には、『人生フルーツ』という2017年公開のドキュメンタリー映画もお薦めします。弁造さんの世界観につながる、素敵な老夫婦の生活が垣間見られます。